専修人文論集 104号
（2019）001-025

曲亭馬琴の短編合巻（十六）『代夜待白女辻占』（中冊）

板坂則子
専修大学文学部教授

前稿に引き続き、曲亭馬琴作、歌川国貞画『代夜待白女辻占』中冊の翻刻を掲載する。凡例は前稿を参照されたい。また、作品解説等は、次号に記載予定である。

翻刻『代夜待白女辻占』

［中冊見返し］（振り仮名・句読点等は原文のまま）

曲亭馬琴著
代夜待白女辻占中冊
歌川国貞画

［中冊見返し一十一オ］

邯鄲五十年之夢寐判支魂膽三拾頁之新奇趣向

文政十三年庚寅孟春

永寿堂西村屋与八版

［十一オ］

三

よみはじめ頃は霜月末つ方、歌種三位覚高卿の息女玉枕姫は、栄華屋の隠居夢介が仲立ちにて、薮の下なる日の出の商人かん田屋盧五郎へ縁談とゝのひ、表向きは夢介が娘分に披露して、かの借金の五百両を支度金のつもりに取り組み、婚姻の日も定まりければ、盧五郎は結納の目録ともろともに件の借用証文を覚高卿へ返しまゐらせ、待ち受けの支度して、その日を遅しと待つほどに、年ごろ火をするたん田やの生作も、親分果報次が仲立ちにて、その姪の白川を嫁にと談合とゝのひて、婚礼は盧五郎と同じ吉日なりけれども、生作はやうやくにその日を送る者なれば、その夜こゝへも嫁の来るを人には告げず、只ひとり。心ばかりの用意をしつゝ、その日の暮るゝ

を待ちたりける。しかるにこの年は冬のはじめに閏ありて、寒さは常にいやましつ。雪の降ること早かりけるに、しかもこの日は大雪にて、その夕暮れより風すさまじく、つひに吹雪となりしかど、これかれのつぎへ

〽玉枕姫、下女白川ら、嫁入りの夜、雪降りて且路に兵火の起こりしかば、送りの人〳〵慌てまどひて、ひたすらに走るところ。なほつぶさには次の本文に見えたり。

〽どつこい、すべるな。

〽そこだぞ〳〵。

〽なんでも早く送り込んで、早くとつて返すが良い。嫁入りどころか、たいへん〳〵。

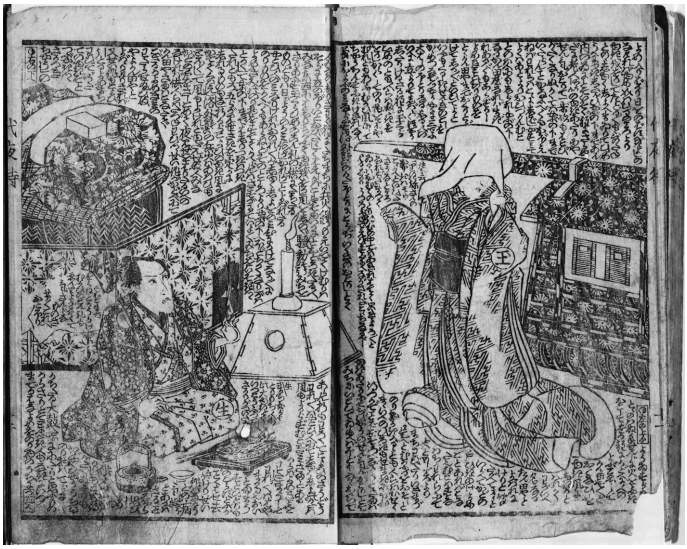
〽わづかな日傭賃で家を失なつてはつまらねへ。二百の祝義をとりそこなつても、送り込むとお暇にしやう。

〽みんながその気よ、急いだ〳〵。

〽隠居さんがござらねへから、おいらはお先まつ暗だ。そこらで聞いたら知れるだらう。モウちつとだぞ〳〵。

［十一ウ―十二オ］

嫁入りばかり日を延ばすべき由のなければ、夢介は昼の頃より雪を犯してたどる〳〵も、歌種殿、宿所へまゐりて、姫上につき従ひ、薮の下まで案内の為にとて急ぐ程に、さらぬだに老人の雪あたりにや、疝気おこりて一歩も運びがたくなりぬ。かくては薮の下まで至らんことかなふべくも覚えねば、われらはこゝにしばし休みて、良くは後より追ひつかん。聟とのは人にも知られし薮の下なるかん田屋なれば、紛れあるべくもあらずかし。嫁君の乗り物を疾くかん田屋まで送り届けてしか〴〵といひてよと、いふも苦しき疝気の腰をかゞめつ撫でつ、やうやくに三条大橋のほとりなる知る人の家に立よりて、しばらく保養したりける。さる程に玉枕姫の供人らは吹雪を犯し辛



［十一ウ―十二オ］

くして乗り物を早むれども、折ふし向かひ風にして提灯を吹き消され、難義におよぶのみならず、洛外の片ほとりに当時いくさの起こりしとて、人みなのゝしり騒ぐ程に、たちまちに兵火燃えいでて、煙は空に立のぼり、いとおびたゝしく見えしかば、こはそもいかにと驚ろきたる。人みな東西に走り違ふて、雪を犯し風をしのぐ騒動路を去りあへず。玉枕姫の婚礼の供に立ちたる者どもは、日傭のかみ何がしかれがしと呼ばれたる雇ひ人のみなりければ、おのれ〳〵が宿所をのみ心にかけてなか〳〵に乗り物を舁くべくもあらねど、その所より薮の下へ程ちかくなりしがは、嫁君の乗り物を棄てて帰らんはさすがにて、いよ〳〵路を急ぎつゝ、とかくして薮の下まで走り着きは着きたれども、盧五郎が見世先を定かに知れる者もなし。折から今宵の雪風に、加てて加えし洛外の兵火は間も遠くして風も良けれど油断せぬ、人みな門の戸をさしこめて、夜見世をはりたる家のなければ、供人らは尋ねわびつゝ、生作が門辺にてかん田屋様はこなたでござるか、嫁君の渡らせ給ひぬ。

やよかん田屋と呼ばゝりけり。されば又、生作も今宵引とる嫁待ち侘びて、うたての雪ぞとつぶやきつゝ、盃、銚子の用意すらもの整のはぬ手せんじに、火を吹き起こしてをる程に、門辺に人の呼ぶ声して、かん田屋〳〵とおとなひしを、雪風に吹きかどはれて我が家名なるたん田屋と呼ばれにけりと聞違へて、オイと答へて門の戸引き開け、嫁御とあればこなた也。聟はすなはち我らにて、火ともし頃より待ち侘びたり。いざまづ是へと迎ふるを、遅しと乗り物かき入るゝ供人らは心せくまゝ、家の広きも狭きにも心得つかで言葉をそろへ。仲人さまは雪当たりにて持病の疝気が起こりしとて路に憩ひてゐ給へば、程もなく御出あらん、折も悪くて今宵の騒動、われ〳〵は雇ひ人にて、宿所の方は風も良からず。聟君さまとあるからは、嫁君をわたしまうして我〳〵ははや罷る也、お暇まうすと、一人も残らず飛ぶがごとく馳せ去さけり。生作は仲人の病気とあるはさることながら、思ひしよりも供人の多かりしも心得がたく、あたりも輝く鋲うちの乗り物は、寺に勝ちたる太鼓に似たりと思ふものから、さりとて問ふべき人もなきに、いつまでか花嫁を乗り物の内につぎへ

注に云へ力弥さんのお屋敷はモウこゝかへといひたさうな所なれど、黙つてゐるはおむくの取り得、心の中では呆れはてて、只きよろ〳〵と見るばかり。うつろ船で夷国へ流された心地なるべし。

生へ待ち女郎も取り持ち人も、此大雪でいつこう払底、さかりが付いたか猫までをらねど、かう掛け向かひの婚礼も遠慮がなくて気さんじなものさ。サア〳〵これへお通り〳〵。

［十二ウ―十三オ］

つゞきおくべき。水入らずに盃して寝るにはしかじと思案をしつゝ、乗り物の戸を引開けて、いざこなたへと手を取りつゝ助け出して坐に据ゆれば、玉枕姫は綿帽子の隙よりあたりを見給ふに、聞しには似ぬ聟の宿所はわづ

［十二ウ―十三オ］

かに九尺店にして、押し入れ一つあることなく、待ち女郎なんどはさら也、下女も小者もあらばこそ、まことに夫婦掛け向かひの婚礼は心得がたしと思ひながらも、うちつけに問ひたゞすべき由のなければ、仲人なしの盃をつひ済まされて、三幅ふとん二つ枕に一つ寝の夜着なき契りを結びけり。

○これはさておき、たん田屋生作が嫁白川が仲人親なる根手松屋果報次は、この日の昼頃より白川が主の屋敷へ姪の迎ひにおもむきしに、主人も情けある人にて、白川は年あまたよく勤めたる者なれば、送りの者をばこの方より付けて遣はすべけれとて、あんほつ駕籠に乗せ給ひ、提灯持ちの僕をさへ付けられけり。さる程に白川が駕籠の者は、果報次に案内せられて件の駕籠をもたげ出し、行くこと既にはるかにして夕暮れになりしかば、雪風しきりに吹き荒れて、路去りあへぬ黄昏すぎ、洛外に兵火起こりて途中の騒動大かたならず。これにより果報次はしばし宿所に立帰りて、こと鎮まらば後より行かん。薮の下にてたん田屋と尋ねなば紛れあらじ。

送り届けて給はれと送りの人に頼みつゝ、己が家路へ急ぎけり。かゝりし程にかん田屋にては、宵の騒ぎにうち紛れて、夜は早五ツと思しき頃、兵火わの沙汰も鎮まりて、あたりもひつそとなりしかば、盧五郎は忙がはしく小者を招き近つけて、先には洛外ぃの騒ぎにて、嫁御寮の来給ふ時刻も遅くなるべきことながら、やうやく騒ぎは鎮まりて、雪風も薄らぎたり。かゝれば嫁御の来給ふに程あるまじく覚ゆるぞ。なんぢら路次まで出迎ふて導べをせよと言ひ付くれば、小者らは心得て提灯引提げ一両人ゝ、町はづれまで立ち出たり。かゝるところに向かふより、僕が持てる提灯に路照らさせて一挺のあんほつ駕籠の来にければ、小者ら早く声を掛けて、そはかん田屋へ入らせ給ふ嫁君にあらずやと問へば、さなりと答へけり。これも亦たん田屋とかん田屋の間違ひなるを、互ひに心付く者なければ、一人の小者走り帰りて、嫁君様の来ませしと知らせにどよめく家内の混雑、皆、出迎ふる程しもあらず、あんほつ駕籠を舁き入るれば、かん田屋の取り持ち人ら大勢ひとしく受け取りて、中坐敷まで舁き入れたり。その時、送りの者どもは、人〳〵に打ち向かひて、仲人さまは兵火の騒ぎに路より宿所へ立寄りて、後より行かんといはれたり。嫁御様を渡せし上は罷り候はんといふ声を、主の盧五郎聞つけて、しからば祝義をまゐらせよといふに、老僕が心得て盆に載したる包み銭、ひとり〳〵に渡すにぞ、おの〳〵手早く受けいたゞきて、僕は提灯引提げつ、駕籠舁き二人は空駕籠をかたげて帰りゆくほどに、盧五郎を先に立てて次へ

〽みな〳〵覗く。

〽お襟足は良いが、お色が黒いの、まだ仙女香はお付けなさらぬさうだ。

腰元〽お嫁御様のお爪先のあかぎれは、お痛からふ。とく平でもお付けなさればいゝのに。

伴〽味噌すり公家と悪口にいふこともあるなれば、お姫様の飯たきらしいもありさうなものでござりますてや。

川〽御覧の通りのふつゝか者、お目掛けられて下さりませ。

［十三ウ―十四オ］

盧へこれは大きな買ひかぶり、盲に見せてもこの嫁を御姫様とは受け取るまい、ちと外聞にかゝるはへ。

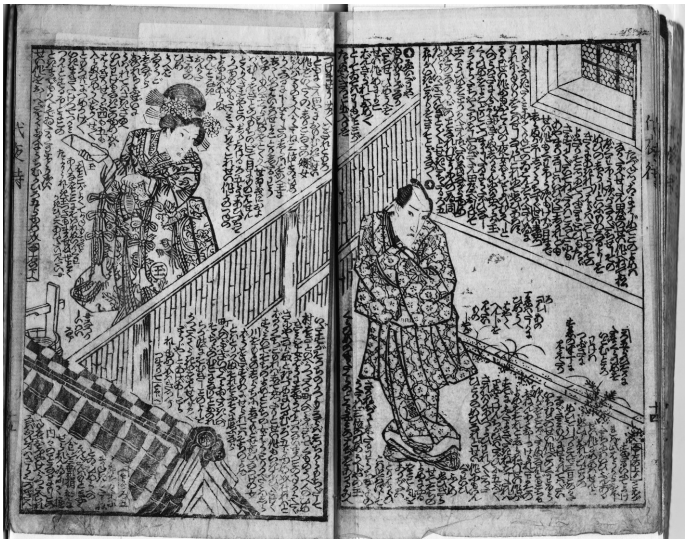
［十三ウ―十四オ］

休息所より嫁君をいざとて人〳〵しるべをすれば、坐敷へなほる嫁のありさま、着るものなども粗末にて、顔ばせもかねてより聞しには似ず。いぶかしさよと人みな思へど、口には得いはず。盧五郎も今宵の嫁入り、舅の内証、不如意になりともあんほつ駕籠はあまりのこと也。それすらあるに、着る物もまがひ八丈。既にはや八つ時分なる上着にて、黒八丈の帯までもいつかう値打ちのない代物。位ばかりは高けれど、銭なければこそ我々が女房にせられたり。それは堪忍すべけれども、我らが家の飯炊き女にさのみ違はぬふとつちやう、見込みちがひも腐れ縁、せんかたなしとつぶやきつ、日ごろ火をする生作が嫁と〳〵の門違ひとは、夢にも知らぬ凡夫の悲しさ。さてあるべきにあらざれば、規式の盃三三九度、千秋万歳万々歳と、皆ことぶきつゝ、果ては只大酒盛り

に小夜ふけて、二階を閨の妹背山、水も漏らさぬ舟底の新枕こそうたてけれ。白川もはじめより聟の家のていたらく、かねて聞しにこと変はりて、富たる人のごとくなれば、いといぶかしく思ふものから、叔父の果報次が中戻りしてこゝに居らねば、問ふ由もあらねど、貧しき人の筈なりとて、富める男を嫌ふ女子のなきは浮世の人情なれば、白川は疑ひながら心の内に喜ぶのみ。うひ〳〵しさに盧五郎にまだ問ふこともなかりけり。

○されば又、根手松屋果報次は、その次の日も去りがたき要用ありて藪の下へ赴かず。第三日の昼頃に、ちとの暇を得たりしとて、たん田屋へ来にければ、生作やがて出迎へて、婚姻すでに整ふたる喜びを述べて、その夜のことをしか〴〵と告げ知らせ、且又、嫁のていたらく、心得がたきことの趣き、かやう〳〵とさゝやくにぞ。果報次ふかく訝りて、まづ白川に会はんとて呼び出して対面するに、我が姪白川にはあらずして、世に稀なるべき美人なれば、これは〳〵とばかりに驚くこと大かたならず。その人ならぬことの由を生作に説き示し、玉枕姫にうち向かひて、その来歴を尋ね問ふに、玉枕姫も驚きて、その身の素性はかやう〳〵と、かん田屋盧五郎に婚姻のことの趣きをあかし給へば、生作も果報次も、これかれ嫁の門違へせしことの由をやうやく悟りて、共に呆るゝばかり也。その時、果報次は腹の内に思案をするに、我が姪の白川は既に盧五郎が妻となりて、今は三日に及べるに、取り戻して生作に添はするとても、そのかひなし。こはおの〳〵宿世より定まる縁なるべしと思ふ心を、生作にも玉枕姫にも説き諭し、貧しき者ゝ妻となるも良き女子を計らず娶るも、皆これ業因なるべければ、腐れ縁ぞと諦めて、夫婦なかよく添ひ遂げ給へと、言葉を尽くしたりければ、玉枕姫も今さらに元の白地になる由なければ、遂にその義に任せけり。

○されば又、かん田屋盧五郎が仲人親なる栄華屋夢介は、病み臥したること両三日、この日やうやく痊快せしかば、かん田屋へ赴きて、婚礼の夜に出席せざりし怠りをいひ説きて、且ことぶきを述べけるに、盧五郎はそ



［十四ウ―十五オ］

の夜のありさま、ならびに嫁のていたらく、思ふには似ぬことゞもを、かやう〳〵と告げ知らせて、且つぶやき且うらめば、夢介つや〳〵心を得ず。それは合点のゆかぬことなり。まづ姫上に対面して由を問はんと奥に赴き、白川を見て大きに驚き、盧五郎ともろともにその来歴を［つぎへ］

生へ俺よりうぬがいけつ太へ、こつちの嫁を横取りして逆捩に来たか。大泥棒めが。

果へ生作は俺が子ぶん。いひ分あらば静かにいやれ。

剣の峯では行かぬぞよ。

夢へハテ理詰めでも語れることじや、騒いじや悪い、せくまい〳〵。

盧へいけつ太へ奴めらだ。モウ了見がならぬぞ、うぬ。

［十四ウ―十五オ］

尋ねつゝ、こゝに初めて、この嫁は仲違へせしたん田屋の生作へ、根手松屋果報次が仲立ちしせし、その姪の白川といふ者なる由を聞くに呆れつ、腹は立てどもその夜

さり粗忽にて、具に問ひも正さずして抱いて寝たるは、こなたにも誤りなしとはいひがたし。しかれども生作も果報次も、今日が日まで知らぬ顔してうち過ぐせしは、しやつらが深き企みにて、かねての遺恨をかへさん為に、我に手もりを喰はせしならん。これにて思ひ合はするに、生作めも一昨日の夜、女房を呼び迎へしと、人の噂に今朝聞ゝぬ。しからんには、かやつらが玉枕姫を横取りして妻にしたるに疑ひなし。アラ腹立ちや口惜しや、いざたん田屋へ押しかけて玉枕姫を取り返さん。御大義ながら夢介殿、仲人のことなれば証人の為同道〳〵いたさん、いざとく〳〵とせきたちたる盧五郎が憤りを、さこそとうなづく栄華屋夢介、我が仲立ちせし姫上を生作めに横番切られておめ〳〵としてゐては、わしも男が立ゝぬ也。きつと出入りを付けませう。サア〳〵ござれと諸共にたん田屋に赴きて生作をいたく罵り、こなたの媚女は雲の上人、歌種三位殿ゝ姫上なるに、下女はしたの白川を替へ玉にして一杯くはせ、横取したる横着もの、玉枕姫をとく返せ、異義に及ばゞ村長殿へ持ち出して目にもの見せん、とく返さずやとの、しりたける盧五郎に、相槌をうつ夢介も畳たゝきて、これ生作、世の常の嫁にはあらぬやんごとなき御方様の姫上を、仲人しながら己らふぜいに奪ゝれては、先様へ言ひ訳もなきこの夢介は腹切り勝負、四も五も入らぬ、姫上を返せ〳〵と諸共に詰めかけ〳〵、息巻きたけつて掴みつかんとする程に、この時までも帰らでゐたる果報次は、生作を押し隔てゝ両人に打ち向ひ、盧五郎、夢介、言葉が過ぎる。いふて良ければ此方から御身たちには言ひ分ある。生作に娶せんと思ひしおれが一人の姪を、引づりこんで三日このかたなぐさみ者にせられては、だいいち聟の生作へ、この果報次が男が立ゝぬ。なれどもこちも不念にて、押しつけられたるその嫁を、それと知らねば生作が既に二夜さ抱き寝をしたれば、了見違ひは互ひに五分〳〵、されば堪忍強ひわれ〳〵、たつた一人の姪なれど生作にも因果いひふくめ、思ひ切らせてそちの嫁にやる。男気をありがたい取り計らひとは思はずして、逆ねぢに来たる横着者。歌種三位の姫上じやの玉枕姫の股倉のと、暗闇の恥を明るみへ出すがそつちの勝手なら

ば、こつちから持ち出して村長殿へ訴へる。町人のぶんざいで、雲の上人の姫君を女房にしやう筈はない。まづこの事から正さにやならぬと、理詰めにひるむ盧五郎、夢介。それはとばかり口ごもれば、してやつたりと生作も勢ひたけく進み出、そちの嫁とこちの女房、取り替へたくは白川を元の白地にして戻せ、許婚の女房を傷ものにせられては、そちの嫁とは取り替へぬ。それを不足に思ふなら、町人の分際で位高き人の息女の聟になりしと、己らが法にそむきしことの由を訴へて、憂き目を見せん。サア〳〵どうじやと揚げ足とられし夢介は、きつくり詰まりて盧五郎をかたへに招き、歌種殿、姫上の縁談は、もと借金ンを棄捐にせられん為にして、極内々のことなるに、もしこの事を公へ訴へられなば御身はさら也 つぎへ

〳〵盧五郎、ひそかに玉枕姫を挑むところ、訳はつぶさに末の半丁に見えたり。

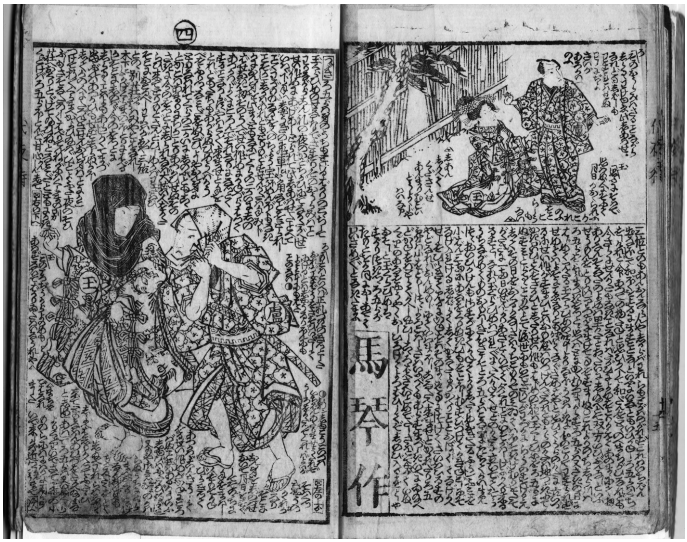
盧〳〵アレあの声はたしかに姫上、はやく返事を見たいものじやが。

玉〳〵男がよくて金持ちで、あんな男に添はれぬ因果。便りうれしき玉章も、任せぬ世とて書き人へ会ひたい見たい、なつかしいはいなァ。

［十五ウ］

三位殿も安穏ならんや。しからば我らも咎は逃れず。これは一番出直して和睦をするに増すことなしといふに、否ともいひかねし盧五郎は、口惜しけれど命あつての物種と思ひかへして和談を整へ、間違ひなれども今さらにせんかたもなきことなれば、互ひに嫁を取り替えて、あのまゝにて扨ありなん。そなたの嫁は里方と相対にし給へとて、双方いひ分なしといふ証文を取り交はし、立派に負けて事を済ましぬ。

○これよりの後、白川は盧五郎を気まづき夫ゝ思へは、とにかく睦ましからず。盧五郎は又、先の日に初めて見た



［十五ウ］

る玉枕姫の、聞しよりなほ麗しきに心のこりて忘られず。せめてはよそに声なりとも聞てなぐさめばやと思ひて、裏の方に立出るに、生作が住まひとは母屋は一軒隔つれども、裏の方は地つゞきにて、垣只一重を境としたり。生作もはじめの程は、玉枕姫を盧五郎に盗み取らるゝこともやとて、渡世にも出ざりしが、わづかに羅宇のすげ替えしてその日を送る悲しさは、うち籠もりてのみゐては細き煙を立てがたさに、一両日以前より、朝とく出て夕暮れごとに忙しげに帰り来る。留守としなれば玉枕姫はつれ〴〵に耐へかねて、背戸の方に立いでて、空うち眺めてもの思はしき、心さこそと盧五郎は、こなたに立ちて垣間見つゝ、物いひかけんもさすがにて、かねてより認めおきたる封じ文を、小判三両に穴をくりぬき紐を通し結びつけて、垣根越しにて投げ入れける。しばらくしてかなたより帰りことと思しくて、投げかへせしを開きて見るに、金をばそのまゝ返事につけて、さいはひ留守の宿なれば御目もじにて言はまほし。あなたへ来ませと書ゝれたり。盧五郎は小踊りしつゝ、喜ばしさはいふ

べきもあらず。貧しき家にゐ給へど、金をば取らで返し給ひし心ばへさへいとめでたし。さはとてやがて犬潜りの穴をやうやく押し広げて、四つ這いしてぞ忍び入るを、来しや遅しと玉枕姫は、すがりつきつゝ盧五郎が袂を顔に押し当てて、只さめ〴〵と泣きたまふ。

盧〳〵そのお恨みはさることながら、知らるゝ訳ゆゑ此しあはせ。なれどもしばしも忘れはせぬ。わしに如才があろかいのふ

玉〳〵思ふに添はで、思はぬ人に添ふて月日の送られふか。これのふ、男らしうもない、思案しかへてくださんせ。あんまりむごい、胴欲じやはいなア。

馬琴作

［十六オ］

四

つゞき盧五郎は身の内も溶けるばかりの心地して、玉枕姫の背中なでさすり、そのお恨みはことわりながら、婚礼の夜の門違ひにて、仲違へせし生作めに揚げ足とられて此しあはせ。たとへていはゞ下手将棋の飛車角などを取られしごとく、我が物なるを人の重宝、面目もなきことぞかし。しかはあれども取り戻せんかたは、手短かに御身を此まゝ伴ふて、蔵の二階に忍ばせおき、扨その上で生作めに金面はつて扱はゞ、欲にころんでそれなりに納得することなからずやは。とく〳〵来ませと手をとれども、立ちもあがらぬ姫上は、頭をふりつゝ涙をぬぐひ、よしや御身に伴はれて蔵の二階に忍ぶとも、こゝとかしこはあまりに近し。取り扱ひせぬその前に、今の夫に知られなば、大ぜい人をかたらひ来て取り戻さんとひしめかば、禍ひそこに起こるべし。わらはが親三位殿ゝ別荘は

都はなれし木下蔭、鞍馬のほとりにはべるかし。そこに忍ばゝ、今の夫に知らるゝことはよもあらじ。かくてまづ当分は扱ひもせず、知らぬ顔して、かの人に尋ねさせん。御身はことにかこつけて、折〳〵鞍馬へ通ひ給はゞ、一夜二夜の添ひ臥しもさそな楽しく侍りてん。願ふは鞍馬の別荘へ送り届けて給ひねと、涙と共にかきくどけば、盧五郎ほとんど甘心して、そは究竟の隠れ家なり。そこに御身を忍ばせおいて、月日を過ぐしてその後に、手を回し人をもて金びら切つて扱はゞ、困窮してをる生作めが、金に転ばぬことやはある。かういふ首尾はふたゝび得がたし。又もや御意ぎょの変はらぬ内に、鞍馬へ送り届けなん。御身も支度をとくし給へ。われらは宿所へ走り帰つて、ふたゝび来て伴はん。合図を違へ給ふなと、示し合はして盧五郎は、又犬くゞりより潜り出、さて見世の小者らには、俄に用事いで来しかば、近郷きんごまで次へ

盧〳〵元はといへば正札付きのきつとした俺が女房を、誘ひいだして逃げるとは、浄瑠璃本にも読本にも、見たことのない新ン趣向、こいつは一番当たりませう。誰ぞ後ろを語つてくれゝば良いが。

玉〳〵この頃中から夜の目も合はず、泣いてばかりゐたはいな。うれしや町を出離れました。

［十六ウ―十七オ］

赴く也。明日はかならず帰るべきに、皆あきなひに油断をするなと、ひとり〳〵に心得させて、留守をば伴頭何がしに委ねおき、明日まで途中の小つかひにと銭七八百腰に付け、大太刀一本笠一蓋、すべて身軽に支度して、宿所を出てしのびやかに、生作が背戸の方へ立ち寄りつゝ戸をたゝけば、玉枕姫も既にはや裳裾を壺折褄からげして、おこそ頭巾に面をつゝみ、戸を押し開けて

〳〵盧五郎さんか

［十六ウ―十七オ］

〳〵姫上、上首尾。此ひまにいざとく〳〵と手をひきて都の方に走るものから、海道は人目もいぶせく知りたる人に会ひもやすると、思へばわざと回り道して湖水の方に立出て、唐崎のこなたより白川山の山こえして、鴨川をうち渡り、鞍馬に行かんと急ぎける。既にして盧五郎は、玉枕姫を助け引てたどる〳〵も、白川山の峠まで登る程に、路いと暗き木下蔭よりいと大きなる狼の、一ト声たけつてまつしくらに走り出つゝ、盧五郎に喰らひつかんとしたりしかば、あなやとばかり驚き騒ぎて、逃げ走らんとする折から、一トくま高き松の繁枝のにはかにそよぐと見るほどに、いとおそろしき人面蛇にんめじやく路を塞いで表れ出、逃げんとしたる盧五郎が足を尾をもて巻き止め、百錬の鏡よりなほも光れる眼をいからし、血を盛る盆よりなほ赤きくれなゐの舌を吐きて、盧五郎が頬のあたりをいく度となく嘗めしかば、こゝにいたつて盧五郎は、更に生きたる心地もせず。叫ばんとするに声出ず、逃げんとするに身も亦動かず。顔色がんしよくさな

がら土のごとく、手足は大かた冷えわたりて、生死も知らずなりにけり。玉枕姫はこれにも構はず、盧五郎に先立ちて半町ばかり行き過ぎしが、あとべに人の呻く声を聞つゝ見かへり、立もどりてかや〳〵と打ち笑ひ、此畜生ども、たはむれすな、その人は我が男也。とく〳〵行きね、しりぞかずやと静かに叱りとがむれば、かの人ン面蛇も狼も頭を垂れて敬ふごとく、盧五郎を打ち棄てて木の間に走り入ると思へば、かたちは見えずなりにけり。しばらくして盧五郎は、人心地は付きたれども、轟く胸は静まらず。あたりを見るに怪しきものなく、玉枕姫はかたへに立てり。只にこやかにうち笑みて、先には由なき畜生どもが、御身にたはむれ驚かして時を移せしこそおぞましけれ。いざ給へとなぐさめて、盧五郎を助け起こしつ再び路を急ぎけり。このありさまに盧五郎は、ひたと呆れて怖げたち、つぎへ

大蛇〳〵日高川といふ見えで巻き殺さうか、嘗め殺さうか。お好み次第蛇はいのふ。

狼〳〵おほかみ八目助言はせぬが、埒があかぬとおれが取るぞよ。

盧〳〵先には狼、後には大蛇。飲まれるか喰はれるか、二つに一つはない命、なむあみだぶつ〳〵。

玉〳〵ヲヤばからしい。そのやうに怖がると面白がつて威すぞへ。サア構はずとおいでイなア。

［十七ウ―十八オ］

腹の内に思ふやう、あの狼をも大蛇をも、いさゝか怖るゝけしきなかりしこの女子は、我が思ふ誠の玉枕姫にはあらで、妖怪変化のまざ〳〵しく姫に化けたるにぞあらんずらん。とは知らずしてうか〳〵と、伴はれしこそ悔しけれと思へども、口には得いはず。色も恋も覚めはてゝ疎ましきこと限りなけれど、今さら棄てて逃げんとせば、たちまち怒りを引おこして、命を取らるゝ事もあるべし。只此上は運にまかして、行くところまで行くにはし

［十七ウ―十八オ］

かじと思案をしつゝ、心ではあらゆる神と仏を念じて声明のほか他事もなく、鬼に取られし心地して、夢の浮橋渡るがごとく、とかくして白川の山をやうやく越えはてて、吉田の森をうち過ぎつ。浮き寝ながらに水鳥の鴨川堤に来て見れば、こはいかに、川幅のひろき事、日頃にはことかはりて、かの天竺にありといふ流沙河の八百里もかくやと覚えて、渺々たる向かひに遠山たかく聳えて、夕立雲のたなびくに似たり。こゝにいたつて盧五郎は、夢うつゝのさかひを弁へず。折ふしあたりに船のなければ渡るべくもあらざりしを、玉枕姫は汀なる枯れ蘆一ト本を折りとりて、水中に投げ入れつゝ、ひらりと乗るに身は沈まず。盧五郎にもとく乗れとて、手を引たすけてこれに乗するに、さいはひにして沈まねども水勢さながら矢ゃのごとく、大波ひまなく打ち寄せて、目くるめき足ふるへて、怖さ危うさいふべくもあらねば、姫の袂にしがみつきて、念仏を唱ふるのみしつれども、つゝがなくさしもの広き川幅なるをまたゝく暇に流れよりて、むかひの岸に着きにければ、はじめてほつと息をつきて、

又只姫に助け引かれ、川原に沿ふてゆく程に、行く手は峨々たる山路にて、その高く険しきこと、白川峠のたぐひにあらず。盧五郎は又こゝにいたつて身さへ心も疲れ果てて、よれるがごとくなりしかば、岩がね枕に倒れ伏して、いと哀しげなる声を震はし、かく疲れてはいかにしてこの山を越えてゆくべき。しばし憩はし給へかしと侘ぶれば、玉枕うち笑ひて、汚なきことをいふ人かな。この山をだにうち越ゆれば、かの別荘へ遠からず。わらはが肩へかゝり給へと慰めつ励ましつ、わりなくも手を引たてて件の山によぢのぼるに、荊棘いやが上におひ

つぎへ

盧〳〵足もぐら〳〵目もぐら〳〵、どういふ因果で此やうな怖い目にたび〳〵会ふやら、色男には生まれぬことだス。

玉〳〵だるまさんを見やさんせ。蘆の葉に乗つておいでなんだが良いはいな。

盧〳〵ア、苦しい〳〵、死にます〳〵。

玉〳〵アレサ怖いことはない、早くおいでよ。

［十八ウ―十九オ］

まつはりて木こりの通ふ路だもあらず。こゝに重なる巌あり。かしこも屏風を立てたるごとく、登らんとするに足よろめき、下らんとするに目くるめく。鞍馬のつゞら折はものかは、信濃路なる久米路の端、飛騨山ひだの籠渡しも、これにはいかで及ぶべきと思ふばかりの険しき山路を、玉枕姫は物ともせず、あるひは盧五郎が腰を押して千尋の巌によぢのぼらせ、又はその手を引き助けて、万尋の谷に下る身の軽きこと鳥のごとく、その早きことかげらふに

［十八ウ―十九オ］

似たり。盧五郎は身の内に冷や汗を流しつゝ、からくしてこの山を越え果つれば、行く手に桃の林あり。時ならぬ花咲きみだれて、くれなゐなる実さへなりたり。只これのみにあらずして、名もしらぬ香木霊艸あちこちに生ひ茂りて、砂は黄金を敷けるがごとし。これ仙境にあらざりせば、極楽浄土にこそと思ふに、林のほとりに茅葺きの亭ち坐敷あり。唐木つくりの諸折り戸に玉枕姫まづ立よりて、いざこなたへと導べをしつゝ、そがまゝ内に入る程に、盧五郎はおそる〳〵縁側よりにじりあがるに、その家の作りざま日本のごとくならず。又画で見つる唐国の住まゐにも異なり。家いは極めて広からで、二間ま三間まにすぎねども、鉄刀木の床柱、蘇芳木の天井板、きれい壮観いふべくもあらず。しかれども此家を守る人のをらぬにや。爐には釜のたぎりながら、いで迎ふるものもなし。そのとき玉枕姫は壁に沿ふたる柱に依りて、ほと〳〵とうち叩けば、たちまち壁の内よりして一人の女童あらはれいでて、いとをとなしく額を付き、姫上帰らせ給ひしか、いと〳〵遅くはべり

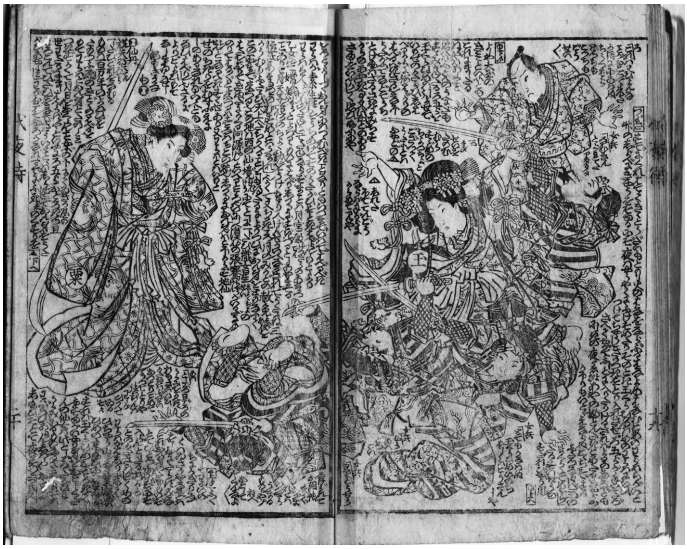
といふを、玉枕姫見かへりて、汝たちさこそ待ち侘びたらめ、この方ざまはわらはが夫也。まだ婚礼の盃せねば、そをものせんとて伴ふたり。用意をせよと急がしたつれば、女童は心得はてて、立つよと見ればたちまちに壁の内にめりこみつ。程もあらせず又一人の女童と諸共に、銚子盃くさ〴〵の肴さへもていづるに、すべて壁の内より出、壁の内に入りぬれど、裂け破れたる跡もなし。不思義といふも愚かなれば、盧五郎は呆れはててきよろきよろと只ながめてをり。かくて二人の女童が青貝の卓袱台へ玉の盃、瑠璃の皿、黄金の金碗、玳瑁の手塩小皿、白金の匙、象牙の箸を置きならべたる。肴は百味の飲食にて、みな人間に稀なる珎膳、目を驚かすばかりなり。さる程に玉枕姫は盃をとりあげて、一ト口飲みておもはゆげに、ナウ盧五郎ぬし、今宵が妹背のはじめなれば、御身にまゐらせはべるかしといひつゝ、なかば飲みかけて差す盃を盧五郎はいそがはしく受けいただきて、飲むうま酒は甘露にもなほいやませる美味妙醇、これぞ仙家の薬酒なる。天漿玉液なるべしとて、我を忘るゝ盧五郎は、さしつおさへつ飲むほどに、その日もつぎへ

盧〳〵壁の内からせりだしとは、こいつも亦あたらしい。梅幸きどりでゐる俺なれば、この位なことはありそふなものだ。しかし、しまひに喰はれねばよいが。

玉〳〵まうし盧五郎さん、そんならはじめてあげるぞへ。私ばかりにものいはせて、もの思はしいあの顔つき、白川さんとかいふ奥様に、まだお心が残るのかへ。

［十九ウ―二十オ］

つゞきすでに暮れ果てて、菊燈台も燈火の花をならぶる花嫁花婿、女童らが糸竹の調べに興をそゆるにぞ。夜はやうやくに更けそめたり。その時、玉枕姫は女童にいひつけて銚子盃を取り入れさせ、盧五郎が手を携さへてや



［十九ウ―二十オ］

がて臥所に入りたりける。されば夜の物なども錦の夜着、綾のふとん、焚き込めたる伽羅の薫りもいとゞえならぬ心地ぞする。ふたつならべし玉の枕、たてめぐらしたる水晶の簾 屏風、よしや大国の君といふとも、これに増したる閨はあらじと、思へばふとんの上にだも進みかねたる盧五郎を、玉枕姫は引よせて、妹背の語らひしはべるからに何はゞかりのはべるべき。さるをなほ疑ふて、などて打ち解け給はざる。先に路すがらの怪しき事、又、此宿のありさまをいぶかしく思ひ給ふにや。夫、かしづく御身には、包むべきことなりともいつまで言はではべるべき。妾が素生を打ち明けて、その疑ひを解きはべらん。もとより妾は人ン間の種にして種ならず。まことは月宮殿の天津乙女にて、嫦娥と呼ばるゝ者にはべり。しかるに過ぎつる年、過てることありて、月天子の勅勘ンをうけ奉り、人間世界へ流されて、歌種三位覚高卿の娘とは生まれし也。かくて又ちかき頃、月の帝の赦免をかうむり、ふたゝび天上へたちかへることをしも得たるにより、つひに御身を伴ふてこの所まで来つる

也。この地は西の仙境にて、年に一ト度織女星の機を織りて砧に掛くる、河源といへるところ也。いにしへ漢の張騫が筏に乗りてはる〴〵と来つるは、すなはちこの地也。しかるに御身は遠からず、地仙となるべき宿世あり。又、妾とは妹背の契りをむすぶ縁のあるなれば、こゝへ伴ひはべりし也。さるにより、今宵もてなしまゐらせし酒も肴も仙丹天漿、一ト度これを嘗むる者は百万年の齢をたもつ不死の奇特のはべるをもて、妾と御身と楽しみ尽きず。かくて月日を送らんこと、薮の下にて居酒屋の世渡りに増しはべらずやといふに、盧五郎おどろきつ、且よろこんで額を撫で、さういふことゝは知らずして、御身を疑ひ怪しみし、わが心こそ愚かなれ。既に不死の薬を服してわが命に限りなくは、居酒屋なんどは惜しむにたらず。皆これ御身のたまものぞとて、ひとつ夜着にぞ入らんとしたる折から、外の方騒がしく女童が走り来て、費長山ンなる粟飯姫の来給ひにきと知らすれば、玉枕姫おどろきて、衾かいやり身を起こし、件の仙女は此としごろ互ひに恨みある者なるに、知られては災ひあらん。しばらく音なし給ひそとて、夜着を

つぎへ

盧〳〵これは又ひよんなことが起こつて来た。顔に似あはぬ中つ腹。どつちもこつちも豪勢〳〵。

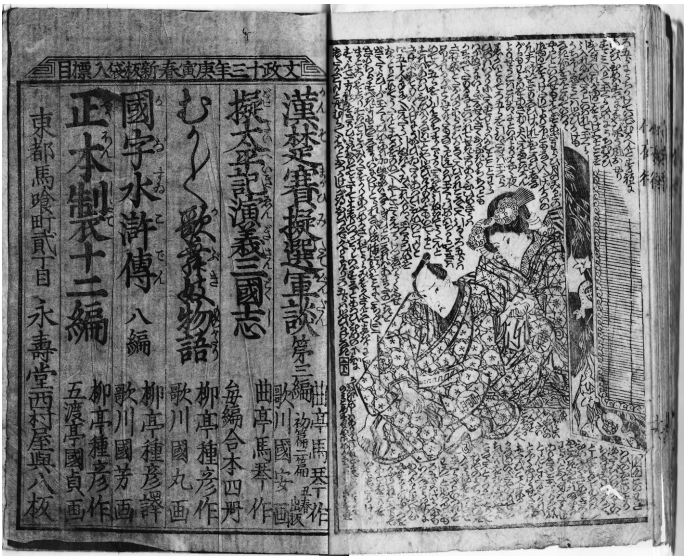
玉〳〵多勢を頼む群雀のちよつちよとござつて討たふとは、お宿の知れたほてててんごう。ならば手絡に絡めて見や。

女兵〳〵なむさん、取られた。アタタタ。

女兵〳〵とても敵はぬ玉枕姫。命惜しくは降参しや。

女兵〳〵やらぬは、どつこい

粟〳〵年ごろ日ごろの恨みを返す折もさいはひ、敵は無勢、おつとり込めて討つて取りや。後陣はわしが控へてゐるぞよ。



［二十ウ］

女兵へオヤ〳〵どうせう。投げられてお開帳まで拝まれては、一生うまるものじやアねへ。起こしてくんなよ〳〵。

［二十ウ］

盧五郎にうちかけて出迎へんとする程に、粟飯姫は既にはや屏風おしやり進み入りて、玉枕姫にうち向かひ、御身は誰が許しを受けて男を引入れ給ひたるといはれて、玉枕うち微笑み、こは思ひかけもなき、何を見とめていはるゝやらん、といはせも果てず嘲笑ひ、月の帝の御許しを受けたりしより程もなく、人ン間界の凡夫を伴ひ穢れしおこなひしながらも、妾をあざむく大胆不敵、論より証拠はこれこゝにと、いふより早く夜着かいとりて盧五郎を引出せば、玉枕姫は怒りに耐へず、妾が男と妾が寝るにいらざる穿鑿、岡焼き餅、ちつとも構ふてたもるなと、いはれてせきたつ粟飯姫、さうはさせぬと互ひの争ひ、かなたへ引かれこなたへ引るゝ、盧五郎は只よれるがごとくせん方もなく見えしかば、玉枕姫は力を極

めて盧五郎を引はなち、枕刀を引抜きて討たんとすれば、粟飯姫は敵はじとや思ひけん、ものども出よと叫ぶにぞ。もの丶蔭にうかがひ居たる粟飯姫の腰元四五十人、手に〳〵短刀引抜きて、みだれ入りつ丶玉枕姫をおつ取りこめて討たんとするを、もの〳〵しやと支えつ受けつ。しばらく防ぎ戦かひしが、玉枕姫には加勢かせなく身ひとつなれば、あまたの敵を切り散らすべき由もなし。なまじいに生け捕られなば後悔そこに立ちがたし、一トまどこ丶を退きて、我が身方を駆りあつめ、かさねて恨みを返さんとて、しきりに進んで一方を切り開き、表を差して走り出るを、ソレ逃すなと粟飯姫の下知にしたがふ腰元共、むら〳〵ばつとおつかけしが、得追ひつかで帰りにけり。盧五郎は思ひかけなきこの禍ひの起こりしより、ふた丶び生きたる心地もせず。只うろ〳〵としてをるを粟飯姫なぐさめて、さのみ驚き恐れ給ふな。妾と御身は宿世あり。さるを玉枕が寝取らんとしたる也。かれは遠く逃げ失せたれば、ふた丶びこ丶へ来ることかなはじ。いざや妹背の契りを結ばん。やよこなたへと手を取りて、閨の内へぞ引き入る丶。梅を散らして桜狩り、いづれを悪しと思はねども、盧五郎は此上にもいかなる憂き目に逢はんかと、思へば心やすからず。袋を被りし猫ならで、後しさりをのみしたりける。

粟へやぼらしい、何じやいの。もつたいつくると、こそぐるぞへ。

盧へおぼしめしはありがたけれども、まだ一向に飲み込めませぬ。御免なされて下さりませ。

（付　記）

画像は専修大学図書館向井信夫文庫蔵本を使用しています。本文の判読に際して、国文学研究資料館「所蔵機関との連携による日本古典籍デジタル画像データベース」によってネット上で公開されている、九州大学文学部所蔵『代夜待白女辻占』の画像を参照させていただきました。記して御礼申し上げます。

なお、本稿は平成三十年度専修大学中期研究員の研究成果の一部です。